

茅 風

— Breeze from the field of thatch-grass —

2010年12月20日
森林塾青水
事務局便り
茅風通信 32号

10周年記念「茅刈り講習会・検定」の集合写真

□7～11月の活動報告とトピックスあれこれ（事務局）	1
◇古民家畏るべし（稲 貴夫）	2
◇猛暑の草原に志の涼風が吹く（草野 洋）	3
◇先日はコモンズ村でお世話になりました（林 ぬみ子）	4
■特集：10周年記念フォーラム	
◇セミナー「基調報告・講演」の要旨（海老沢秀夫）	4
◆10周年のお祝と諏訪神社屋根替えの報告お礼（林 實治）	6
◇身体感覚で考えた「飲水思源」（松沢英喜）	6
◆ススキ立つ上ノ原の地の恵（古高利雄）	7
◇草原は二度チャンスをくれない（江間直美）	8
◆命の原点（金哲洙 一家）	9
◇三郎さん（島貫倫子）	10
◆『ここに戻ってきた！』という感動（落合暢之）	10
◇学生部の皆さんの感想（岩寄 梅田 谷本 松井 山本 石原）	
□会員コーナー：『古民家再生奮闘記』④（北山郁人）、など	15
□第7回講座「コモンズ村ふじわら」のご案内	16
■編集後記～塾長のつぶやき～	17

■7～11月の活動報告とトピックスあれこれ

事務局

- 7月10日～11日：「古民家再生セミナー」開催。1泊2日で中之条、新治、藤原地区の古民家を視察、茅葺建造物の利用の状況や大変さを学んだ。参加10名。町田校長先生、ありがとうございました。（2頁、稲レポート参照）
- 7月12日：午前、みなかみ町・岸町長訪問。10周年記念フォーラム後援のお願い方々、もろもろ情報交換ご提案やら。午後、品田社長のご案内で沼田地区の志援（協賛）企業キャンペーン活動。
- 7月21日～22日：麗澤中1年生「水源の森フィールドスタディ」と川越小5年生「里山探検隊」の受け入れ。熱暑のなか、スタッフの皆さまご苦労さまでした。
- 7月24日：今年第2回目の東京学習会「流域市民が支える利根川水源の地の草原」を環境パートナーシップオフィスにて開催。参加12名。講師の海老沢幹事ならびに浅川幹事、ご苦労さまでした。
- 8月17日：諏訪神社例大祭にあわせて、志援（協賛）企業トップの皆さまに藤原をご紹介します「茅風交流会」実施。（3ページ、草野レポート参照）
- 8月20日～23日：古民家再生プロジェクトの一環として、学生部の浦上さんと太田さん、浅川幹事が藤原入りして、50軒近い古民家の調査と北山家の土壁塗りや洗面所、トイレのタイル貼りなど体験実習。
- 9月18日～19日：第4回講座「コモンズ村・ふじわら」開催。草原の生き物調べ、外来植物の抜き取り。そして、ミズナラ林の活用策としてキノコ栽培用原木の伐採を初トライ。参加15名。カモシカの「ほたか」君や上ノ原が大好きなドイツ人 M.T さんとのときめきの出会いが続き

楽しかった。（詳しくは、9月22日付けブログ参照）

- 9月26日：第3回東京学習会「関東地方の野焼きの現状と課題」を中央区女性センター・ブーケ21にて開催。参加10名。講師役の永野さん、幹事役の稲さん、ご苦労さまでした。
- 10月8日：みなかみ町・岸町長と対談。記念フォーラム直前の情報交換ならびに「生物多様性特区」設定の提言、など。（清水、北山）
- 10月23日～24日：10周年記念フォーラム。2日間の延べ参加者150人強。「暮らしの現場で生物多様性を考えよう」をテーマに、茅刈り技術や山村文化伝承の場を持ちつつ交流。新たに顔を出していただいた地元や町役場の皆さま、東京から馳せ参じた学生諸兄やご家族連れ、そしてお猿さんやカモシカ君も加わって、正に「人と生き物が入り合う上ノ原」の賑わいだった。地元のならびにみなかみ町役場、早稲田環境塾はじめ、ご後援ご協力いただいた諸団体・関係者の皆さまに深く感謝いたします。（4ページ以降の特集ご参照）



原剛・早稲田環境塾塾長（早稲田大学特命教授）

○11月15日：みなかみ町・岸町長訪問。10周年記念フォーラム無事終了の報告お礼をかねて、今後の方針・課題などにつき打合せ。「全国草原再生サミット in みなかみ」の2012年開催方針を確認、あわせて「生物多様性条例」制定のご意向を承った。

○11月13日～14日：第6回講座「コモンズ村・ふじわら」開催。茅ポッチの引き出し作業と「山の口終い」。参加者12名と地元や町田工業の皆さんと力を合わせ、2日間で合計470ポッチ(2,350束)の引き出しを完了。うち、350束は10周年記念「茅刈り講習会・検定会」で刈られたもので、来年の諏訪神社屋根替え用に全量地元へ寄贈。23日に木曾武子さんと連れだってご参加いただいた林えみ子さんから、当日詠まれた素敵な俳句の句の便りをいただきました。(4ページをご覧ください)



○11月15日：みなかみ町・岸町長訪問。10周年記念フォーラム無事終了の報告お礼と今後の方針・課題など打ち合せ。「全国草原再生サミット in みなかみ」の2012年開催方針を確認、あわせて「生物多様性条例」制定のご意向を承った。

○11月27日～28日：会員の岩井さま(市川市・市議員)が引率された市川ボーイスカウト第3団役員ご一行の藤原視察ご案内。来年度以降、当地でのボーイスカウト活動実施のためのキャンプ地選定などが目的。

●トピックスあれこれ

・7月25日、会員のTさんから「家電エコポイントの環境寄付を森林塾青水宛にしました」との嬉しいお知らせ。寄付受け入れ第1号！これに刺激されたのでしょうか、11月までに会員のT.SさんとE.Sさんから相次いで、住宅エコポイントご寄付のお知らせ。皆さまも奮ってお願いいたします。(=^^) 尚、この寄付金はカヤの買上げ価格の上乗せや学生会員の活動参加費の補助など、いわゆる「環境支払い」に充当する方針です。

・9月18日付けにて、第10回「日本自然保護協会・沼田真賞」授賞決定の朗報が事務局に！「茅場という二次草原を文化と生物多様性の両面から再評価し、流域ネットワークを通じて保全する先駆的・モデル的な活動」とのご評価。表彰式と記念講演会が来年1月22日(土)の午後開催されます。皆さん奮ってご参加ください。(詳細は事務局にお問い合わせください)

・みなかみ町が「生物多様性条例」制定において準備中です。2011年4月施行を目指した、全国地方自治体に先駆ける動きです。上ノ原ほか3つの地域を指定する具体案が3月議会に提出される見込みです。

◆古民家畏るべし

古民家再生セミナー」参加報告一

稲 貴夫

先日、本会のホームページにも紹介いただいた「古民家再生セミナー」に参加してきました。主催者の森林塾青水(せいすい)は、利根川の最上流域・みなかみ町藤原地区上ノ原でミズナラ林やススキ草原21㌔を町から借り受け、そこを拠点に、都市との交流など山里再生のための活動を行っている団体です。

茅葺屋根をトタンで覆っている家屋が多いものの、藤原地区には築百年を超える古民家が点在しています。これを地域の財産として位置づけ、都市との交流拠点として再生活用する。さらに、古民家や文化財の屋根に必要な茅の供給地としてススキ草原の再生活用も図る、という構想のもと企画されたセミナーです。中之条から猿ヶ京を経て藤原地区へといたる一泊二日の日程でした。

茅葺古民家の中には、富澤家住宅(中之条町)や雲越家住宅(藤原地区)など、国の重文に指定されているものがある一方で、主不在のまま数十年が経過し、数世代にわたる人々の歴史を伝える文物とともに朽ちようとしている古民家もあります。藤原地区の諏訪神社舞殿(写真)は、屋根に植物が生い茂っていますが、ここも上ノ原のススキで葺替える予定です。

今回、一番驚いたのは、猿ヶ京で宿泊した古民家の民宿「焰硝屋」です。何やら物騒な名前ですが、玄関口には古びた「陸軍御用」の看板がありました。明治時代に、周辺の農家の床下から焰硝土を集め、火薬の原料である硝石を精製して陸軍に納めていたのが、名前の由来です。後でさらに調べて



みると、雨が多く硝石がとれない日本では、養蚕地帯の民家の床下で、蚕糞や草木などを利用して焰硝を生産してきた、という江戸時代からの歴史があるのだそうです。

古民家が秘める思いもよらない歴史に触れたセミナーでした。

<伝統木構造の会会報「伝木」第二〇号(平成二十二年八月二十日)より引用>



◆猛暑の草原に志の涼風が吹く ―「茅風交流会」実施レポート―

草野 洋

8月17日は猛暑日となった。首都圏では38度に届くほどのうだるような暑さ。

標高1050mの上の原もジリジリするような暑さであるが、草原には時おり涼風が吹き、水温12度ぐらいの十郎太沢の水は、のどを潤すと心地よい涼感を感じさせてくれる中で茅風交流会が開催された。

今年度から本格的に始めた、青水を「志」で応援する志援(協賛)会員キャンペーンも8月1日現在既存法人会員4社を含めて23社となり、みなかみ町などの源流域について一段落したことから源流域の志援会員21社に、一度上の原のフィールドと藤原をご案内し、今後の青水の活動にパワーとアイデアを頂戴するという趣旨で意見交換会を呼びかけてところ10社の参加をいただいた。

参加者は、みなかみ町鬼頭副町長、町田工業株式会社町田社長、小荒井製菓小荒井社長、辰巳館深津社長、武尊山開発(株)雲越宝台樹事業所長、みなかみ高原ホテル200 小関総支配人、源泉湯の宿松乃井戸澤社長、喫茶しなだ品田社長、みなかみ町商工会山田経営指導員。また、みなかみ町から木村、金子さんに随行いただいた。青水から清水塾長、草野塾頭、北山現地事務所長、石原若頭がアテンドした。なお、当日は朝日新聞の記者が取材をかねて終日同行した。



当日はみなかみ町のワゴン車運行の協力を得て、上の原に集合したのが10時30分。上の原もさすがにこの日はさえぎるものがない炎天下ではじっとしていても汗が噴出す。参加メンバーの紹介を終え、十郎太沢沿いを柞の泉へ向けて散策開始。途中、武尊山や谷川岳を眺め、ハギやオミナエシなどの植物のこと、春の野焼き、除伐、そして10月に行う茅刈、草原を維持するために必要な一連の作業などを説明しながら登っていく。

ところで、今年のススキは丈が低く、旺盛さがいまひとつ、一方、ススキに比べて雑草の繁茂は激しく、ススキの生育はあまり良くないと感じていたところ、町田社長に聞くと首をかしげて「今年はあまり良くないなー」、そう言えば今朝会った幸新のおばあちゃんもそのようなことを言っていた。

今年の夏は暑さが厳しく、雨も少なかった(一回一回の雨は多かったというが)のが原因ではないだろうか。



やがて、一行は炎天下からミズナラなどの樹林に入ったとたんにひんやり感を体感。柞の泉では水温10度の天然湧き水を味わってもらい、設置した自動カメラの説明などを行う。その後、木馬道・管理道を経て広場に帰る40分コースでフィールド散策を終える。

この間、参加者の皆さんから異口同音に「いいところですね〜」「おちつきますね〜」「もっと活用すべきですね」との感想が聞けたのは大変うれしいことであった。

ところで、メンバーの中の戸澤社長は、森林や山菜、キノコ、動物の習性などのとても詳しく、ご自分でも山菜やキノコを採取してホテルのオリジナル料理に一品加えておられるとのこと。聞けば、東北のマタギと一緒に暮らし、山のことを教わったとのこと。



会場を幸新に移し、意見交換の場を設定してあったがフィールドで時間をとられ、資料の説明と10月に行う10周年記念フォーラム及び茅刈検定への協力を特にお願いで昼食。

実は、茅風交流会にはもうひとつ目的があった。それは、この日は藤原諏訪神社の夏祭りの日であり、伝統芸能獅子舞や奉納相撲が興行され、藤原が賑わいを取り戻す日である。

茅葺きの諏訪神社の舞台で行われる藤原の文化・歴史にふれてもらうためにわざわざこの日を選んだのである。

獅子舞や奉納相撲はプログラムによって举行されるが時間は早くなる場合もあるとのこと、時間を見計らって諏訪に移動。しかし、プログラムは大幅に遅れており、獅子舞の最終幕がなかなか始まらない。みなさん仕事の都合を付けて参加されていることもあって、この場で解散とすること

になった。それでも2〜3名の方にはその後始まった獅子舞を鑑賞していただき14時40分ごろ藤原をあとにした。

猛暑の中、そしてお忙しい中、ご参加いただいた皆さんに改めて御礼申し上げます。また、ご協力いただいたみななみ町役場、藤原区、商工会に心から感謝申し上げます。



今後、支援会員キャンペーンの対象はいよいよ利根川沿いに中流域・下流域に下っていく。このような意見交換の場を何度か開催するとともにフィールドを見ていただく機会を作るなどして“利根川つながり”の「志力」を結集して流域みんなで支える「流域コモンズ」の実現を青水は目指している。

◆先日はコモンズ村でお世話さまでした 林 糸み子

先日はコモンズ村でお世話になりました。挨拶もせず帰ってきてしまいました。木曾武子さんも良かったといって、来年の野焼きにも是非行きたいと約束が出来ました。今日(11月17日、編集注)、武子さんから俳句が届きましたのでお知らせいたします。

茅引きの重さ柔らぐきのこ汁	武子
青水の素敵な仲間山仕舞い	武子
干草の匂いも旨し野の昼餉	糸み子
都人の尊きカ萱積まる	糸み子

手伝い出来ず、皆さんに感謝の気持ちを二人で話しながら帰って参りました。

冬将軍が頭をもたげ始めました。遠からず銀世界に成ることでしょう。其の日が来ても良い様に、日々、冬構えに明け暮れております。

此のたびは本当にお疲れ様でした。



林さん宅の櫓の冬囲い。これも茅葺き！

■特集：10周年記念フォーラム

開催初日の23日は24節季にいう「霜降」。昔から当地藤原では初霜が降りてから茅刈りを始めた由。奇しくもその日の朝、初霜の歓迎を受け、その翌日本邦初(世界初?)の茅刈り検定が行われたのです。10周年記念だから何もかも初めての事ばかりで大変だったが、嬉しいことも沢山あった2日間でした。(編集子)

◆セミナー「基調報告・講演」の要旨

海老沢秀夫

森林塾青水10周年記念「草原再生フォーラム」

上ノ原は人と生きものの入会地／暮らしの現場から生物多様性の保全を考える

とき 2010年10月23日 午後2時～4時半

ところ ホテルサンバード ホール

(群馬県みなかみ町藤原49581)

■10周年感謝の挨拶：世代間と流域をつないで新たな担い手を 清水英毅・森林塾青水塾長

上ノ原の管理を継続し、上ノ原の生態系サービスをこれからも「サステナブルに」利用していくためには、上ノ原をささえる新たな担い手の参画が欠かせない。そのひとつは、老→壮→青と「時」をつないでいくこと。さいわい森林塾には最近、「学生部」ができた。地元でも老から壮・青へのバトタッチを実現したい。もうひとつは、点→線→帯と、利根川つながりで「空間」をつないでいくこと。上ノ原だけで完結していた「入会」を、流域ぜんたいの人のつながりが支える「流域コモンズ」へと展開したい。

上ノ原にはすばらしい可能性がある。それは、草原やミズナラ林という生態系が我々に与えてくれるすべてのもの、つまり生態系サービスだ。それを我々はどう受け取るのか、地域の暮らしがよくなるために活かすにはどうしたらよいのか、この2日間、藤原という地元、上ノ原という現場で、みなさんといっしょに考えよう。



■挨拶：生物多様性を町のキーワードのひとつに

岸昌孝・みなかみ町町長(代読：鬼頭副町長)

最近、富士山麓のススキ草原に生息するミヤマシジミのことが報道された。ハギがないと生きていけない蝶なので、火入れがされなくなったためにハギが減り、ミヤマシジミも減ってしまったとのこと。茅を刈り、火入れをして利用することがどれだけ大事なことが、あらためて知った。みなかみ町は合併後、自然環境保全宣言を出した。今度はあらたに「生物多様性」を入れたい。上ノ原での昆虫採取の制限なども具体的に検討し、全国草原サミットをみなかみ町で開くことを考えたい。

■開会宣言：明日につながる共同体の未来モデル

原剛・森林塾青水顧問(早稲田環境塾塾長)
この藤原のすぐ近くの尾瀬の保護をきっかけに生まれた自然保護協会。その会長をしていた沼田先生の「沼田眞賞」に先日、森林塾青水が決まった。「茅場という二次草原を、文化と生物多様性の両面から再評価し、流域ネットワークを通じて伝える先駆的・モデル的な活動である」というのが受賞理由。多くの同志が心をかよわせ、日本の原風景ともいべき上ノ原をめぐっていま起きていることは、歴史と風土に立脚した未来の共同体のモデルになるだろう。自然とは何か、人間とは何か、最高の価値としての文化とは何か、今日と明日と、汗を流しつつ考えよう。

.....
原剛顧問の開会宣言のあと、海老沢秀夫・森林塾青水幹事が上ノ原を「持続的に保全する仕組みを考える」と題して、上ノ原保全のための環境支払い、「ススキへの恩返し基金」構想などについて報告した。フォーラムは引き続き、日本自然保護協会の朱宮文晴さんによる基調講演、「生物多様性の10年―地域の保全活動がみんなの暮らしを支える―」、そして全国草原再生ネットワーク会長の高橋佳孝さんによる「全国の草原と保全活動の状況」についてと題し、阿蘇などの報告がおこなわれた。

■地域の保全活動がみんなの暮らしを支える

朱宮文晴・日本自然保護協会保全研究部長



絶滅危惧種の増加など、里山の生物多様性が悪化している。原因は、1980年代以前が開発やオーバーユースだったのに対し、80年代以降は逆に自然資源の利用低下、つまりアンダーユースの時代になってしまった。人間活動と地域の生物多様性は互いに関係しあっている。たとえば伝統的な農作業がおこなわれているところでは、「刈取り草地」の部分に植物の種類が集中し、キキョウなど固有種が多いことがわかっている。屋久島では、1960年代に里山地帯の照葉樹林伐採・植林がすすみ、この人間活動に対応するかのようによクシカが激減した。ところが人の活動が落ちた80年代以降は、一転して生息数が急増、島民の生活や生物多様性に影響を与えている。一方宮崎県綾町では、郷田実町長時代の70年代から、照葉樹林を守ることを宣言して町づく

りをすすめてきた。綾の照葉樹林のブランド化に成功し、その成果は観光客の増加などに顕著に表れている。現在進行中の「綾の照葉樹林プロジェクト」では、都会の人を地域に呼び込む仕組みをつくり、綾の照葉樹林の半分近くを占める人工林を照葉樹林に復元するなど、照葉樹林とともに生きる町を引き続き目指している。

■全国の草原と保全活動の状況

高橋佳孝・全国草原再生ネットワーク会長



1000年、あるいは1万年の歴史をもつとされる阿蘇の草原で見いだせる価値は多方面におよぶ。草原特有の動植物が暮らす場になっていて、600種もの植物が確認されている。世界一級の風景地で、年間2000万人もの観光客を呼び寄せている。九州の6大河川の水源で、流域の230万人が恩恵を受けている。草原の地面にしみ込む雨の量は、意外にも森林より多いのだ。もちろん、採草・放牧という農業・畜産業の基盤だし、環境教育や憩いの場にもなっている。

草原を維持するための輪地伐り(防火帯)や野焼き作業には膨大な労力が必要だが、高齢化で人手がまったく足りなくなっている。そこで始まったのが野焼きボランティア。野焼きをしている阿蘇の牧野の3分の1でボランティアが活躍し、今では草原維持には欠かせない存在だ。トマトなど、草原のススキ堆肥を使った野菜づくりもすすんでいる。草を刈って使う―これが草原を維持し、生物多様性を守ることに繋がっていく。水田の土手を刈って堆肥にすることで、おいしいコメができ、ヒゴタイなど希少種が守られている場所がある。「お茶の味がよくなるように」と茶畑にススキを敷く例がある。「茶草場」と呼ばれるこの茶畑周辺の草地には、絶滅危惧種がいっぱい守られている。草原の景観や生物は、国民ぜんたいの公共財。観光や草原産品を積極的に購入する消費者として、直接支払いの財源を支える納税者として、あるいはボランティア活動など市民として、草原保全にかかわっていくことが大切だ。地域自身も、「草は重要な地域資源」ということを再認識して、多様な人たちと手を結び、地域の枠を越えた新たなコモンスの仕組みづくりに取り組んでほしい。「全国草原サミット」は、そのよいきっかけになると思う。

(以上)

◆10 周年のお祝いと諏訪神社屋根替えの報告お礼

氏子総代 林寛治

昔懐かしい上ノ原の思い出と諏訪神社屋根替えに至るまでの長い道のりを語っていただきました。(編集子)

森林塾青水10周年記念おめでとうございます。藤原住民の一人として地域活性化に協力して戴き、私共の知らない事迄掘り起こし、都会の方々との交際を広めて戴き、まことにありがとうございました。

私どもは上ノ原と聞いただけで、懐かしい思い出が蘇って参ります。小学4年生以上は毎年、上ノ原の防火線作業を行い、昼食は高い見晴らしの良い所でおにぎりを食べるのが何よりの楽しみで有り、水場の清水を笹の葉で飲むのが何よりでした。私共は小さかったので茅刈りの経験はありませんでした。其の後、農家の屋根替えも少なくなり茅場が40年も放置され、この度、森林塾青水様が10年前から野焼きや茅刈りを行ない、上ノ原の再生に努力され、古道の再生や生物の調べ迄進めて戴き、地元の我々は驚くばかりです。

私が清水塾長さんと出逢ったのは4年前ごろからだと思います。諏訪神社舞殿の屋根替えの話が始まり、茅をどうするかと云う話になり、そこで、清水塾長に相談しました。出来たら茅刈りに参加してほしいとのことでしたので、私達も初めて茅刈りに手伝いを致しました。

又、町当局とも相談し、文化財に指定されている建物であり前回も助成金を戴いて居りますので、まずは町に請願書を代表区長と神社総代の連名で提出致しました。其の後、町より連絡があり総務文教委員会で議題として取り上げたので出席する様にということで出席した所、全員の方々の賛同を戴きました。

そこで地元も発起人準備委員会を発足致しました。又、不足金をどうするか協議となり、区民の皆様へ御願ひする事を決定致しました。年度も変わり新区長さんと相談し、まず見積書が必要である事になり、塾長清水さんと相談し町田工業さんより見積書を送付して戴きました。

其の後、22年3月議会で助成金が決定したとの事が区長さんに連絡がありましたので早速会議を持って戴き、藤原は12月には雪が降りますので11月までに完成すると決め、区長さんを中心に諏訪神社屋根替へ奉賛会を発足し、9月に藤原区組長会議を招集して戴き、区民の皆様への助成金を戴く事を決定しました。

清水塾長さんとも話を進め、茅700束を贈呈して戴き、町田工業様と奉賛会会長との話も進み、お陰様で仕事も順調に進み10月23日に無事



完成する事が出来ました。改めて、森林塾青水の方々へ町田工業様に御礼申し上げます。これからも末長く、森林塾青水様の益々の御発展を御祈念申し上げます。

◆ 身体感覚で考えた「飲水思源」

松沢英喜

「この清々しさはなんだろう」。待望の草原デビューを果たした元シティボーイ(?)。怒涛の2日間のご感想です。(編集子)

初めまして、利根川水系、江戸川の愛飲者です。

もともと里山が好きで、週末ごとに里山ドライブを楽しんでいます。今回縁あって「清水塾10周年記念草原再生フォーラム」に初参加させていただきました。感想を一言で言えば、痛くも楽しかった、です。

エクスカッションは、素晴らしいお天気と澄み渡った秋の空気のもと、清水塾長の森林インストラクション付きの楽しいハイキング、軽い坂道を土の感触を足で味わいながら水源に至ります。ひとしきり歩いたところで、何か音がしませんかとの問いかけ、一生懸命耳を澄ましても何も聞こえません。タネ明かしは泉から水の流れ出る音、聞き分けた人もおられたようですが言われて目で見ると全くわからず緒戦から落ちこぼれ気味。熊やテンなら遠くからでも匂いで嗅ぎ当てるのでしょうか、進化の先端を行っている？自分は、ふだん視覚偏重の生活をしていて本能が退化しているということですね。

こんなちっちゃな水源があちこちの山に沢山あって、集まって、蒸発したり植物を養ったりしながら大きく育て、多少汚されて、それをまた消毒されて、そして我がお腹にはいるという訳ですね。納得。



セミナーも中身が濃くて、心地よい散歩の後にもかかわらず一睡もしませんでした。茅野の水源涵養に果たす役割は初耳で、それまで水源＝自然林、ススキなんて畑の敵、茅野は荒れ野でゴルフ場よりはマシくらいに考えていたのですが、目から鱗が落ちる思いでした。そのあとの交流会は秀逸。大学の先生、学生さん、留学生さん、社長さん、ジャーナリスト、など色々な人のお話(多様性?)を聞くことができ、大好きな水をタプリー飲んで、そんな訳で、日曜日の朝までは大満足、来て本当によかった。

問題は日曜日の実技。目の前に広がる草原をみて、さあ刈るぞ、説明はほどほどにして早く刈らせてくれよ、とやる気満々、加えて主催者の陰謀で各グループに美人がちりばめられており、年不相応に頑張ってしまう。そんなこんなで、講習が終わった段階で既に息切れ、腰が痛み出すわ、直っていたはずの50肩が10年ぶりに再発するわで、検定では1ポッチやっと作ったところで時間をたっぷり余したまま(セルフ)ドクターストップ。サクサクどンドンやる筈だったのですが、バーチャルな世界と、身体を動かす現実世界との大きなギャップを実感しました。

さて、日常生活に帰って、腰も治るにつれ、またわからなくなっていました。本音で言うと、わからないことだらけ。水源地の恩をわすれてはならない、うん、これはわかる。自分も出来ることはしたい。茅野が大きな保水力をもっていること、これも知ることが出来た。この心休まる風景、山村文化、これは消えて欲しくない。でも、何のために茅を刈るのだろうか。雑木林ではなぜだめなのだろうか。刈るなら何で刈り払い機を使わないのだろうか。ガソリンを使うから？でも、自分は車に乗せてもらってここへ来たぞ。お寺だって神社だって、昔、作られたときはその時代の最新鋭の技術が使われただろうに、何で手間ひまかけて茅で葺く必要があるのだろうか。

◆ススキ立つ上ノ原の地の恵

一束のてっぺんにいる赤トンボ

古高利男

茅刈り検定で最高点「茅刈り士補」を見事取得された古高さん。来年は、主宰団体「しかはま自然観察会のらえもん」の親子グループを率いて茅場にご来遊されるそうです！（編集部）

図らずも、「茅刈り士補」の名をいただきました。2ボッチの茅を刈ったことを認めていただいたようです。ここ何年も、「誉められる」ということから遠ざかっていましたので、大勢の前で、たくさんの拍手をもらったことは、素直にうれしい気持ちになりました。

茅扱は、初めての体験でした。馬のエサやじゃまになるとしてなら、何回刈った事を思い出しますが、利用目的でせと1時間以上も刈り続けたのは初めてでした。左足を前に出し右手の鎌をできるだけ伸ばしながら刈れば効率はよくなるんだということが、だんだんとわかってきました。鎌は力をこめて一瞬で刈るほうが、疲れなくて良いようでした。そんなことが脳裏に漂ってきたのは、後半の頃です。

茅刈りをスムーズに出来たのは、稲刈りの体験があったからでしょう。振り返れば、小学生の頃には田植え・刈り取りの重要な労働力の一員として、田んぼに立っていたことを思い出します。自分としてはそんなに嫌な仕事ではなかったのですが、回りの風潮は「大変だ、つらい」という空気でした。ですから、百姓仕事はいいことではないような気持ちになったものです。それでも、手伝うほどに、「こうすればいいんだな。うまく結べた。稲の米がたくさんついているな。クモがいっぱいいるな。」と思ったものでした。

今回、2ボッチも刈れたのは、そんな原体験があったからなのでしょう。

この度の「10周年フォーラム」および「茅刈り講習会・検定」で、茅についての世界を大きく広げさせていただきました。

私の認知の茅はススキであり、ススキは仲秋の名月のときの生け花です。他には、古民家の屋根に使われていることと、ナンバンギセルの発生する場所ぐらいのものです。

ところが、茅には偉大な力が、茅には権大な力のあることを学習させていただきました。身近なところでは、箸になるということです。昨年、この茅場で、塾長から茅の箸を手渡され、「こんなに硬いの？」と思いました。遠くから見ていると、風に揺られています。生け花として使うときは、剪定ばさみを持っていきます。ですから、それまでの茅のイメージは、

「やわらかい」ということでした。そんな観念を吹っ飛ばしてくれたのが、茅の箸でした。敷材(マルチ材)・堆肥・敷料(畜産用)の利用では、なるほどと思いました。一番胸を疲れたのは、「ストローペイルハウス材料」の利用方法でした。茅葺屋根は、そのひとつなのでしょう。壁や床の断熱材として新しい価値の発見は、今を生きるたちの責務かもしれません。また、茅の茂る風景美として、山菜の採れる茅場として、茅が生えているから得られる恵みにもっともっと気づきたいと思いました。



茅場での昼食は、また格別でした。茅場をおとしてみえる紅葉の山々を見ながら、地の恵のナメコ汁・コゴミ和え・カブの漬物・ヤーコンそして焼きおにぎりをいただきました。地の恵が美味なら、それをすすめる人たちのもてなしの言葉はやさしく、いつしか心を癒されていることに気がきました。そして、ナメコ汁を三杯もおかわりしてしまいました。日頃のトゲトゲした体臭が、どんどん薄くなっていくようでした。通勤途上の電車の中で、茅場の風景を感慨深く振り返ってみました。

- ススキ刈りキノコカマキリチョウトンボボッチの山が次々出来る
- この茅は諏訪神社の屋根に行く60名の無言の奉納
- ナメコ汁三杯おかわりしてしまうススキの原の風をうけつつ
- ひとりだけ独占している木々(ひと)はいない赤黄緑の遠くの山々

この度の茅刈り体験で得られた私への波及効果には、どんなものがあるのでしょうか。

☆経済効果…新幹線 10080 円(往復)、指泊代 11000 円、反省会 500 円

☆健康の増進…開放感、人への安心感

☆食文化…ナメコ汁・コゴミ和え・ふきのお菓子を知る・味わう

☆文化の伝承…茅屋根を自分の目で見ると、束やボッチの作り方を体験する

☆環境教育…茅との語らい、茅ボッチの作り方を覚える、茅の箸を使う、紅葉をマジカで見ると、ミズナラ・コナラ・ヤマブドウなどの木々に触れる、沢の水を手ですくって飲む、朴歯を拾う

☆自然環境の保全・維持…微力ながら参加できたこと

☆人との交流…私にとっては、このことが一番でした。

ここに集まった方々からたくさんのことを学びました。皆さんから共有感のようなものをいただきました。帰りの新幹線内での交流は、なんだか世界を広げてくれたように思えます。

2日間の森林塾の講座を受けて、「こんなことをしてみたい」という夢が広がってきた。それは、この地で一番高い

という武尊山に登ってみたいということです。できるだけ多くの仲間と登りたいと思います。武尊山に登れば、この地域ともっと関われそうな気がするのです。その他にも、名倉沢で岩魚釣りをしたい、茅場である上ノ原でスキーをしたい、かまくらをつくりたい、スキの穂でミズグを作ってみたい、と。茅場は、私にたくさんの夢を生み出してくれました。

もう一つの大きな夢は、子どもたちをこの藤原の集落に連れてきて、自然体験をさせてやりたいということです。東京都足立区に住む利根川下流の人々にとって、生活の基幹である電気や水・食料は上流の自然と人々の力によって生み出されているということを知るすべはありません。スイッチ一つの生活に、お店にいったお金を払えばどんなものでも手に入れることができるのです。だからこそ、生産の現場を五感を通して体験することが必要なのだと思います。その機会を、ぜひつくりたいと考えています。

幸いにも、私は、「しかはま自然観察会のらえもん」という親子で自然体験をするグループを立ち上げています。その活動は、今年で10周年を迎えています。10周年を一つの節目とするためにも、利根川上流の水源を見学したり、この茅場に連れてきて存分に仲間と遊んでみたいと考えています。

下流の住民が上流の住民に、共感・感謝の気持ちの育つことを願って、2011年6月には大型バス1台でみなかみ町を訪問しようと、今、楽しい夢を企画しています。



◆草原は二度チャンスをくれない

江間直美

実は、上級クラス「茅刈り士補」をゲットしたのは古高さんと江間さんのお二人だけ。「ばりばり」電通マンを包み込んだ高揚感とは何だったのでしょうか？（編集部）

いまひとつの感覚が私の身体を包み込んでいる。それは「第1回茅刈り検定」の認定で上級クラス(上・下)にランクされたという達成感ではない。自分自身の身体のかなかに新たな生命力が湧きあがってきたような感覚だ。それはどうも爽快感とも違う。高揚感ともいえない感覚だ。

その感覚とは3年前(2007年)の3月、日本自然保護協会が、地域住民で組織する赤谷プロジェクト地域協議会と林野庁関東森林管理局とで一緒に進める「AKAYAプロジェクト(正式名称:三国山地ノ赤谷川・生物多様性復元計画)」の一環として主催したリアルネイチャー・キャンプく森の雪化粧に参加し、約1万ヘクタールの国有林「赤谷の森」に踏み込んだときに感じた感覚と同じだ。場所は、今回の茅刈り検定が行われた、みなかみ町藤

原上の原の隣町、みなかみ町新治地区だ。リアルネイチャー・キャンプでは、オオタカの生態と野ウサギの赤みを帯びたオレンジ色のおしっこを見る機会に恵まれたが、いまでもその残像が私の頭のなかで鮮やかによみがえってくる。

実は同じ高揚感を8年前(2003年)にも味わっている。静岡県西伊豆の松ヶ崎・石部(いしぶ)で味わった高揚感だ。先月2010年10月、その松ヶ崎町で「第16回全国棚田(千枚田)サミット」が開催されたが、当時く石部の棚田オーナーとして稲刈りに出かけた私は、棚田から見える雄大な富士山や棚田自体の景観の美しさ、駿河湾の海の幸を存分に堪能しながら、帰路、伊豆踊り子号の車中で何とも言えぬ高揚感に包まれた。適度にかいた汗と心地よい疲労。体内の血管すべてに新鮮な酸素が送り込まれたようなその感覚は東京に戻った後も数日続いたことを思い出す。

思えば、この高揚感はずいぶんと昔、23年前(1987年)にも感じたことがあった。それは、日本社会がバブル経済に突き進んでいた当時、前年、家族とともに長崎県の五島列島へ移住し自給自足の生活を始めた先輩(当時36才)から放棄開拓村の開墾に誘われ、上五島でチェーンソーとカマを手にした時だ。水俣を知る熊本出身の彼は、「生きるために必要なものは自分で作る。不要なものをどこまで削ぎ落とし生きていけるか挑戦してみる」と、持続可能な生き方を始めていた(現在でも、米、野菜、椿油、ハム、ソーセージ、炭、酒などをつくりほぼ自給自足の生活を送りながら、地域をつなぐ「上五島新聞」の代表も務めている)。

今回の茅刈り検定への参加は、ひとつの偶然に過ぎない。早稲田環境塾で出会った森林塾青水のみなさんから、2010年10月に「森林塾青水10周年記念—草原再生フォーラム」の開催と「第1回茅刈り検定」の実施を知らされたからだ。知人に、今度上毛高原に茅刈り検定を受けに行く、と告げたとき、そんな検定もあるんだ、と驚きの表情を浮かべられたほど、茅刈り検定はユニークだった。しかも第1回と聞いて、初モノ好きな私は即座に飛びついた。

ところが…だ。カマをもつのは棚田で稲刈りをして以来の8年ぶり。小学生のころ(1960年代末から1970年代初頭)、母方の実家(静岡県浜松市、当時、茅ぶき屋根)の田んぼで、毎年ゴールデンウィークに親戚中が集まって行う稲刈りの手伝いに駆り出され、見よう見まねでカマを使ったこともあったが、茅刈りのカマを持つのは初めての体験だった。どう使えばよいのか。気づけば、検定前の講習中に思わず「稲刈り用のカマと茅刈り用のカマは違うのですか」と問いかけていた。柄も刃も少し長い気がしたからだ。実は検定前日のエクスカージョンで訪れた神社で葎き替え作業を行っていた方に「これは葎き替え専用のハサミなのですか」と聞いていた。ごく一般的に見る剪定バサミとは形状が違ったからだ。

なぜ聞いたのか。それはカマを私の身体の一部にするためだ。身体の一部となればケガもしない。カマが手になじむ感覚を早く身につけては…。検定直前の私はそのことだけで頭がいっぱいだった。師匠の林さんは、ザクザク、ザクザク…、ザクザク、ザクザク…と、実にリズムカルにスス

キを刈っていく。その腰使いと左腕と右手の見事なバランス、そしてススキを刈る絶妙なタイミング。カマが身体の一部となった瞬間だ。これだ。ススキとカマと手が一体となったときに出る、ザクザク、ザクザク。この音。そして5束を束ねて出来上がる美しい形のボッチ(茅ツリー)。この形ができれば、茅刈りがきっと楽しくなるに違いない。美しさを追求しよう、そう思いススキを刈り続けた。形状の美しさには、カマ使いの技術やその人の思いのすべてが現れるからだ。

「草原は放っておくと森になる」。広告・広報を生業とする私は数年前、3年ほど大手木造住宅メーカーのPRを担当していたため、森の成り立ちについては学んでいたが、それは机上の知識にしか過ぎなかった。なぜ草原を再生しなければいけないのか、なぜ森になってはいけないのか。今回の草原再生フォーラムでの講義と茅刈り講習・検定で、草原は草原であり続けなければならないことをあらためて認識させられた。というか、草原であり続けるために実践しなければ、との思いが強まった。

環境問題は、生まれ育った自然環境や文化が無視されその土地に生きる人間関係が分断されることから生まれる。環境問題に対する考え方や生き方は、生まれ育った自然環境や文化を尊重しその土地の生き物を食することで形成される。森林塾青水の合言葉は「飲水思源」。今回その意味を考えるまたとない機会となった。上の原く入会の森>での経験は、私の人生にとって大きな転換期となるのかもしれない。私の身体を包み込んでいる高揚感とはその暗示かもしれない。出逢うべくして出逢い、起こるべくして起こり、成すべくして成す。チャンスは自ら望んでも得られるものではない。草原は二度チャンスをくれない。ススキという自然の恵みと上の原に多謝。



第1回茅刈り検定で自ら作ったボッチと筆者
(撮影:早稲田大学/森林塾青水学生部代表・石原光訓)

◆命の原点

金哲洙 一家

ご参加いただいた6組のご家族連れを代表して金さんファミリーのご感想をお寄せいただきました。素晴らしい動画サイトのご紹介もあります。是非、覗いてみて下さい。(編集子)

我が家は毎年、日本のどこかに出かけ、自然、食べ物を楽しみます。いわゆる、山や海の無言の優しさ、怖さに感動し、安らぎの温泉、美味しい食事です。そこで今年は、新たな試みとして、自然、食事だけではなく、人間が加わった日本文化ものぞいてみようとの原に足を運んだわけです。

昨年、日中韓環境ジャーナリスト会の取材をきっかけに、森林塾青水に出会い、素晴らしい取組に感動し、ぜひ家族にもその喜びを味わってもらいたかったからです。特に、

今年からは、中国の上海大学を卒業した姪が留学に来たので、日本を知ってもらうためにも良いのではないかと思います。結果的に家族からは予想以上の感動、喜びの声があがり、本当に良かったです。ただ、言葉の問題もあり、表現は不十分ではありますが、それなりの感想を聞いていただければ幸いです。

命の原点

「命の原点ってそうなんだろうな」と言ってくれたのは妻です。甘みのある美味しい湧水に感動したようです。「ススキ草原に囲まれ、どこから、どのようにきたか分からないが、喉が渇いたときには、すでにそこで流れている湧水。それがまた、汲み上げた指の間からこぼれおちて、ごっそりと再びどこかに姿を隠し、次のだれかの喉を潤す。人間だって、たまたまこの世に姿を現しているだけで、もしかして前世、後世があるかも知らない。わたくしが肉好きであることは、前世にはあまり肉を食べなかったかも」と冗談しました。

「空がそんなに広く、青くて自分がいかにちっぽけなものか再び実感した」と妻の話は続きます。切り抜いたススキ草原の地べたに、仰向きになって空を見たときの感想をこう振り返って言いました。「風に揺れるススキの白い穂、ススキが鎌に刈れる音、広々と展開する青空、綿みたいの漂う雲……。その中に溶け込んでいるようで、本当に幸せだったわ。みんなが汗を流しているときに、ポーとしていたわたくしが悪かったけど」と自己反省もいいたくありませんでした。

「苦勞したくないよ」と思ったが…

娘は「苦勞しなかったよ」と、活動を終えてようやく参加当初の気持ちを明らかにしてくれました。「萱刈り」というと、いかに労働というイメージがあったからだ。でも、パパが上の原活動への家族全員参加を積極的に提案したことだし、反発したとしても負けるのがみえみえだったので敢えて黙って参加した。しかし、現地に行ってみて、美しいススキ草原、きれいな山花、森に対するわかりやすい解説……。見て、聞く間に、いつの間にか萱刈りをする自分がそこにいた。本当に不思議だった。刈ったススキで『芸術品』を作ることに夢中で、苦勞とはまったく思っていなかった。むしろ、楽しみのものだった。その中で、自然に対し親しみが生まれ、汗を流すことの喜びも覚えた」と話してくれました。「ほら、パパの提案は間違っていないだろう」というと、「ヒーヒー」で答えました。

特に、「露天温泉に入って森に囲まれている自分を見て、まさに自分も森、草、空と同じく、自然そのものだなと実感した。本当に楽しかったな。また、行ってみたいなー」と言ってくれました。

「もっと広く伝えたい」

上海大学を卒業し、留学に来た姪は、中国視点から感想を話してくれました。「日本は今回が3回目になるんだけど、正直最初は、日本が物質面で裕福で、環境がきれいというイメージしかなかった。しかし、今回の一連の活動を体験し、そんなに大勢の人が自腹をきってこんな意義深い活動を続けることには驚いた。それもまた、一過性ではなく10年も続き、これからも続けるというから、その精神の奥にはなにがあるだろうと不思議でしょうがない。特に、山奥の地域住民と都市住民が一体となって、ススキ草原を再

生し、単純にみえる萱刈りイベントをすることは、中国では見ることのできない異様な光景だった。ぜひこれを多くの人に伝えたい」と話しながら、自作動画を掲載したサイトのアドレスを私に教えてくれました。

東京出発から現地での楽しみを映した3分23秒の動画です。簡単な字幕も入れており、彼女なりに頑張った面白い作品です。「地元農家などのご要望、あるいは海外向けの発信要望があれば字幕に、日米中韓4カ国の文字を入れることも、ファイルとして提供することも可能」と話してくれました。ただ、今回は、動画のデータ容量が大きいかもあって、みなさんがひとまず楽しめるように、とりあえずネットサイトに掲載したようです。サイトのアドレスは

(<http://www.youtube.com/watch?v=gSJWwCn-hk4>)

ですので、ご興味のある方はぜひご覧になってください。



来年、またこの場所を訪れたら、今年刈った茅は、町田さんの技で神社の屋根になっているでしょう。その屋根には、私が三郎さんに教わって刈った茅も一本くらいは混じっているかしら。その一本は、これから何年、屋根としてこの場所に暮らすことになるのでしょうか。

東京のど真ん中のビルの中で水を飲みながら、そんな風に思いを馳せています。どうかこの水が途絶えませんように。

◆『ここに帰ってきた！』という感動

落合暢之

「大多数の普通の社会人」として落合さんが感じとられた2日間のご印象とはどんなものだったのでしょうか？（編集部）

10月23日、24日と水上に滞在しました。

水上を訪れたのが2回目でちょうど一年ぶりに来ました。前は都内からバスで訪れて、今回は上毛高原駅まで新幹線に乗り、そこから自動車で上ノ原『入会の森』まで送迎していただきました。ルートが違ったのかもしれませんがかなり近くに来て、なんとなくこんな感じの田舎だった気がするかなあというおぼろげな印象のままでした。一年たつとやはり記憶が薄れていくものだと思っていたところ、上ノ原『入会の森』の入り口にきた瞬間に、目の前が開けて、『ここに帰ってきた！』という感動を味わうことができました。はじめてきたときも、あー自然が豊かでいいところだなーと感じたことは感じたのですが、本当にきれいな風景だと感じました。空の青と、澄んだ空気の中に見える紅葉と、目前に広がる一面のススキの金色。貴重な風景だと思います。自然や環境を守らなければという昨今、もちろん大切なものだと思いますが、日々働いていると全く触れることもないし、自分がしなくても、誰かがとってすごしています。そう思っている大多数の普通の（少し意識が低いくらいの）社会人として、どんな価値があったかをお伝えします。

まず、茅の草原の周りを小一時間歩きました。ちょっとだけ勾配があって、草原から山への変化があって、距離も少し疲れるかどうか。普段全く運動をしていない私にとってちょっと息が上がり、自然の中を歩いているという感じがしていい感じです。そのあとのフォーラムで草原について学びました。栄養がありすぎて放っておくと、森になってしまう。刈った茅に使い道がある。便利になっている現代社会ではどこでも、自然を守っていきこうするのは難しいと思います。そんな中でここなら、可能性があるのではないかと感じる事ができました。そして次の日、茅の刈り方の講習を受けて、

◆三郎さん

島貴 倫子

フィールドで再会した林三郎さん（右上の写真）との実にほほ笑ましい会話のやりとり。必見必読です！（編集部）

「鎌を使うのって難しいなあ・・・」

一年前に一度使っただけでは、原っぱの精はそんなに簡単に鎌を振るうことを許してはくれません。

忘れ去られてしまったような暗い植林を抜けると、穏やかな陽光につつまれた金色の草原が目の前に広がります。背丈ほどのススキは、茅として人と共に生きようとしているのか、人のことなどススキにも留めていないのか、穂を静かに風になびかせています。

彼らの背後を守るのは、10月末の色とりどりに燃ゆる山々です。木々や草花にはひとつひとつ名前があり、形も色も性格も異なることを改めて実感します。足元のひときわ大きな茶色い葉を拾い上げ、空を仰げば朴葉の大木。隣には水槇の木が、山葡萄に抱きしめられています。実はすでに熊に食べられて残っていません。それでは、私たちは足元のなめこをいただきますでしょうか。手を伸ばすと、テンの落し物……。そういえば、せせらぎの合間にコオロギの声も聞こえます。

「もう学校卒業しましたか？」

「はい。もう何年か前に。去年、茅刈りを初めて教わった時にも、卒業していましたよ、三郎さん。」

ちょうど一年前に、初めての茅刈りを教えてくださった三郎さん。今年も来たよとお伝えしたら、顔をしわしわにして喜んでくれました。記念撮影では、一緒に並んで撮ろうと、私の腕をぐいぐいひっぱって前の方に連れて行ってくれました。質問事項が去年と同じでも、また同じく答えますから。また、来年もお邪魔しますね。

検定です。一年前に一回だけ体験したことがある茅の刈り方。身についていないのは当然ですが、指導してくれる地元の講師の方を見ていると、なんとなくこうするんだというイメージと、茅の感触と、イメージした通りに動かない身体のもどかしさと、それでも何回かに一回鎌をふるったときに、これだと感じるはまった感じの『ザクッ』という気持ちのよい音と感触。その時以外の鈍い音と重い手ごたえがよみがえりました。刈った茅を集めて、ちょうどいい量ごとに束ねて結ぶという、書いてしまうととても簡単な工程にもかかわらず、なぜか一定したものができないというもどかしさを味わって、試行錯誤するという体験ができます。そして、普段行わないからだの動きによって体も頭もぼうとしてきたところに(検定が始まってちょうど一時間)終了です。自然と関わり合うことが大変なこと、どれだけ便利に暮らしているかに気づき、ほんの少しだけ環境のためになったかもしれないと思うことができる。自然に触れるいい体験ができる!!そして参加する者に優しく、程よく疲れておひるごはんをおいしく食べられる。ぜひ一度体験を。ほとんどの人におすすめです。



◆学生部の皆さんのご感想

岩崎 梅田 谷本 松井 山本 石原

学生部の皆さんはじめ4大学から14人もの若人の参加を得て、フィールドは大変なにぎわいでした。うち6名の皆さんのご感想です。きらきら光る感性と未来への希望を感じます。(編集子)

「地域に大切にされる事」

岩崎絵莉子(慶應義塾大学総合政策学部3年)

今回の体験を通して3つの新しい気づきがあった。それは、「地域に大切にされる事」「人間と自然を繋ぐ自然」、「年配の方との交流」である。

私は、帰国子女ですが、今まで生きてきた中で4年同じ場所に住んだ事がなかった。さらに、いつも都会で暮らしてきて、特定の国、地域、町への帰属意識が非常に薄い。住んだ事あるところは全部自分帰るとこという意識がある。そして、どこに行っても「自分のおうち」という意識は嫌いではなかった。

しかし、その中で、どこか自分の中で田舎への憧れというものがあつた。最近では、農業をしたいという若者が増えているという。都会でのプラスチックな生活がうんざりで田舎に行きたいなどを理由に田舎生活に挑む若者も少なくない。全体的に、田舎への及び、農業への関心が高まっているが、私自身、農業への関心より今回一番感じたの

は、家族や友だち恋人などに大切にされるように、「地域に大切にされる」事への憧れの気持ちである。今まで暮らしてきた環境では、地域との繋がりは、あまり意識することではなく、仲良くなった頃には、また次の土地へと去るのが普通だったためである。新しい場所でまた表面的な関係を気付くのが普通だった。でも、茅刈りを教わった方々や、お昼の美味しいおにぎりを作ってくださった方々、地域の子も達を見ていて、地域社会と繋がっているのがものすごくうやましかった。家族みたいに、無償で愛されているという文化があって、どうであろうとその地域に住んでいるだけで自分の価値があって、無償で大切にされている感じがした。田舎の魅力は、自分が家族を超えた社会の中で暮らしていると感覚が掴みやすいのかなって思って、「転勤族」にはない感情がそこにはあつた。

2つ目は、今回、農作業をしたとは言えるまでの作業はしていないが、茅を刈ることが、人間と自然の繋がりの基本だなと思った。人間と自然の繋がるって農業であると文章では読んだ事があるが、感じる事ができたのは今回が初めてであった。早稲田環境塾の講義でも農業は、人工的は自然的かという話になったが、確かに極めて、ライン引きが難しく、基準を創る必要のないものだなと思った。今まで、生物学に興味を持った事もなく、勉強もしたことが無かったので「茅」という植物があつてその利用方法はもっと知らず、「ぼっち」なんて言葉ももちろん知らず、「すぐそこの生えているモノ」が人の生活を屋根という形で支えていた事も今回初めて知った。

私は、大学でITビジネスについて勉強していて、あらゆる分野でのITの導入を考える機会があるが、もちろん農業への分野のITの導入も考えた事はある。しかし、農業にはインターネットや機械の誇る正確な測定やアルゴリズムみたいなものでは測定できない細かいかつ非規則的な作業がメインだと思った。もっとも命が宿っている仕事であると感じた。命が宿っているというのは、かまを振って、茅を毎回切る時であるが、切るたびに自然と対話をしている感じで、「今日の調子はどう?」みたいな会話が展開されているように感じた。ちなみに、私にはまだ茅語が分からなかった。



最後に今の自分の新鮮だったのは、年齢層の高い方々との交流であつた。普段のから「自分と異質な者や空間」との関わり合いが大好きで、自分と違った文化、環境、年齢、組織で育った人に出会うのが大好きという事もあり、なるべく幅広い人に合うようにしている。普段から、一番身近な大学だけではなく、中学生の登山コーチをしたり、NPOで社会人と一緒に活動をしている。また、自分は文系

学生であるが、積極的に理系学生と関わるようにしている。今回、慶應大学の学生として、早稲田大学の講義、さらに今まで興味のなかった農業という異質空間に飛び込んだのもその意図があった。その中でも自分ともしっかりと離れていると考える年配で、かつ自分故郷を持った田舎の方、さらに、私の触れた事のなかった農業を専門とされている方に出会えてよかったなと思っている。正直、通じあえたかどうかは良くわからないが、そんな今まであった事のなかった人にかまの研ぎ方を教わっている事がすごく不思議な感覚だった。これを学んだという具体的にあげられる事はないにしても、この体験を通して、ふと思う事がきっとあると思う。

茅刈り体験を通して“感じた”原風景

梅田華衣（三重大学生物資源学部4年）

今回、友人に誘われたことがきっかけとなり茅刈り講習・検定に参加するに至った。茅場に到着してまず感じたのは紅葉を背景に広がる開けた空間（草原）が非常に美しいということと微かなノスタルジアである。私自身の地元には、山はあっても草原は少なく、特別草原に親しみがあるわけではなかった。ではなぜどこか懐かしい気持ちになったのか。現代の様々なメディアによるイメージの影響か、それとも人間としての潜在的な価値観なのかもしれない。そんなことを考えながら茅刈り講習・検定がスタートした。



茅刈り講習が始まり、地元の方々から鎌のとき方から茅の刈り方、ポッチ（束）の作り方などあらゆることを教わった。実際自分がやってみると、地元の方々が簡単にこなしている一つ一つの作業が、思う様にできない。1時間の制限時間が定められた検定では、額にじわりと汗をかきつつ茅刈りに没頭し、手や顔にたくさんの傷（ススキによるもの）がついているのにも気づかないほどだった。検定の結果、「茅刈り士心得」という称号を頂いた。久しぶりに体を動かし作業したので、非常に清々しく満足感で満たされた。また、自然の中で茅のお箸を使って食べた昼食は最高に美味しく、幸せを感じるひとときであった。

今回、最も感銘を受けたのは、検定を終えて帰り際に目に飛び込んできた風景の何とも言えない“深み”のようなものである。来た時と確実に違ったのは、私自身が、叡智を持って自然との折り合いをつけてきた先人たちと彼らが育んできた文化にほんの少し想いを馳せることができた、という点だ。

そもそも、風景（ランドスケープ）とは、「空間にあるすべてのもの」であり、地表の相観だけでなく、地球圏、生物圏

の構造、機能、動態の全部、人間活動やその歴史的影響のすべてを含む⁽¹⁾とされている。つまり自然、人間、文化の3つのキーワードを含み、五感を基礎とする概念である。⁽¹⁾よって、私は今回の茅刈り体験で、自然、人間、文化の観点から、自分の目で見、肌で感じ、耳で聞いた、“風景”に出会えたのだと実感した。

この水上町にある日本の原風景は、地元住民でない私のような若者でも、守っていきたいと思える、それだけのインセンティブを与える一つの手段と成る風景なのだと心から感じた。また今問題視されている自然環境の諸課題を解決する上でも重要な意味をもち、原風景から得られる考え方や発想がこれからの日本の大きな財産になるのではないかと思う。そういった意味で、実際の体験（人間、文化の要素）と自然を含んだ原風景を感じることができる森林塾青水主催の茅刈り体験は、非常に意義のある取り組みだと感じた。

地方分権が叫ばれている現在、地元住民が誇る地域資源をどのように活かしていくか、どのように人的なネットワークやシェアを広げていけるか、が問われている。私の大学での専攻は森林管理・計画であり、大学院では森林政策に携わることになる。森林政策と地域活性化は切り離しては考えられないことから、今回の水上町での経験は自身の学問にとって意義深いものとなった。

最後になりましたが、今回お世話になりました森林塾青水の皆さま、水上町の皆さま、そして早稲田大学をはじめとする学生の皆さまにこの場を借りて深く御礼申し上げます。
＜参考文献＞（1）沼田眞（1996）『景相生態学～ランドスケープ・エコロジー入門』178pp



「茅刈り」体験記

谷本大輔（早稲田大学文化構想学部3年）

私は10月23日と24日にわたる森林塾青水の茅刈り講習会、検定会に参加させていただいた。渋滞につかまりながら、約5時間かけてついた藤原は晴天に恵まれ、澄んだ空気で私を迎えてくれた。高野さんから、入会地の説明と、植物の解説をもらった。ここで飲んだ水はとてもおいしかったが、翌日に別の形で感謝することになる。

私たち学生は携帯の電波の届かない山奥のロッジに宿泊したのだが、そのおかげで冬はスキー場になる山の頂からすばらしい景色を見ることができた。

24日はいよいよ茅刈りの講習と検定の日である。私はまだ小学生くらいのときから祖母と畑を営んでいたし、稲や草を刈ることも経験していた。鎌を使うのは慣れたものだから大丈夫だろうと高をくっていたが、ただ刈るだけでなく、束

にしたうえ、5束をまとめボッチというものにしなければならぬということを知り驚愕した。私は非常に不器用で、きれいに何かを作るというのは永遠の難題というべきものだからだ。

実際、やってみると、茅を刈るのは講師の方にも褒めていただけたが、ボッチがうまくいかない。練習ではなんとか形にすることはできたのだが、本番の検定の際は一度は完成したものの、作り方が甘く、倒れてしまい、検定結果も振るわなかった。というわけで、検定には悔しい思いが残ったわけだが、新たな発見もあり、感じたことも多かった。

前日に高野さんが山の紅葉する木々を指し、「紅葉の仕方が多様なのは生育する木々がそれぞれ多様だからだ」と教えてくれたが、草原もまさに多様な生態系が広がっていた。ススキの海の中にきれいな花が凛と咲き誇っていたり、虫がときどき飛び出してきては私を驚かしながら癒してくれた。そして茅を刈った後は「後遺症」が私を苦しめた。肌が荒れに荒れて真っ赤になっていた。周囲も同じくかゆいなどの症状を訴える者もあったが、肌の弱い私は尋常ではなかった。そんなとき、前日に喉を潤してくれた湧水で患部を洗い流すと痛みとかゆみから解放され、非常に気持ちがよかった。そのとき湧水に感謝するとともに、この場所ではすべてが循環しているのだということに気付いた。持続可能だとか、子供たちに引き継いでいきたいとはよくいうが、このススキ野原のなかにそのヒントがあるような気がした。多様な生態系のなかに人間が入り、自然の恵みの水を飲み、恩恵を与えてくれた自然に手入れをし、傷つき、疲れた時はまた自然からの水に力をもらう。そして生態系が保たれる。この循環があれば、ずっと続いていくのではないかと。

そしてまた約5時間の帰途につくわけだが、この2日間の経験は非常に有意義なものだったと繰り返し考えていた。茅刈り検定にももう一度リベンジしたいし、これからの自分自身の人生の糧とできるようにしたいと思う。

みなかみでススキに触れる

松井健太郎（早稲田大学商学部3年）

今回、みなかみで人と自然、文化の関わりを考えることができた。それはやはり実際にみなかみに行き、茅刈りをして汗を流し、全身でみなかみの自然を感じる事ができたことが大きかったと思う。

ススキを何本か掴み、鎌で刈り、それをまとめてボッチにする。言葉にするとたったこれだけのことなのに、その中には多くのことが詰まっている。ススキの匂いや感触、刈る時のザクツという音、ススキに触れて傷つく体、茅刈りにより五感を最大限に使うことができた。五感を最大限に使うことは東京では滅多にない。普段東京にいるときには耳にイヤホンをして外界を遮断する。あえて身体感覚を鈍くして、外部からのストレスを避けようとしているところがある。しかし、みなかみでは自然から発せられる音や景色などをすべて吸収しようと身体が開かれている感覚を味わうことができた。感性が研ぎ澄まされ、身体感覚が様々なものに対して敏感になった。水が流れる音に聞き入り、紅葉しつつある山に見とれた。そして、何とも言えない心地よさと満足感を

感じた。

そのような体験をした後では、自然環境は大切だと思わずと思う。「自然を守るの大切」、この言葉は様々な場所で聞かれる。しかし、リアリティがない。その「自然」とはどのようなものなのだろうか。匂いは、音は、肌触りは？本や新聞を見ても、テレビを見ても、何となくわかった気になるだけで具体的にイメージできない。しかし、一度ススキを刈ると、今まで漠然としていてよくわからなかった自然というのが急に身近に感じられる。実際に茅刈りをして、汗を流す、そのような文化的営みを通して、具体的なイメージをもつことができた。そして、自然環境また茅刈りという文化に対する愛着が深まった。まさに百聞は一見に如かず、である。

生物多様性はなぜ守るのか。小難しい説明ではなく、ここにある自然を守りたいと思う、そんな単純な、理屈を超えた理由が大事だと思う。それが人の心を動かし、人を動かす原動力になるのではないだろうか。そのために実際にこの目で見て、触れてみることの重要性を今回改めて感じる事ができたと思う。

自然は何も語らない、ただそこにあるだけだ。しかし、私達に多くのことを教えてくれる。理屈抜きに美しい、自然からまだまだ学べることはあると思う。

とてもいい経験ができました。ありがとうございます。



草原再生フォーラムの感想

山本優也（早稲田大学文化構想学部4年）

私はこのような活動に参加するといつもコミュニケーションを主題にして思考してしまう。今回も例に違わずそうであったが、あえて本文では異なるテーマを主軸として振り返ってみたい。

私は学生である。学生のすべきことは、社会と自己に関する知を身につけることと、その後社会を支えるための自己という土台をつくることだと考えている。前者は本やウェブ上、または講義やコミュニケーションを通して身につける場合と実際の体験を分析、考察、内省して言語化して身につける場合がある。また、後者は技術を磨くこと、意思決定における価値観や判断基準を整えることなどを意味する。今回、私は茅狩りを通して労働ということについて考えるきっかけを与えられた。

まず、茅狩りを通して感じたことを手がかりに考えたい。私は茅狩りを終えた後二つの事で満足感を得られた。それは試験が終わって自分のボッチを見返した後と、評価が発表された後である。そこから、労働について何らかの知見が生み出せるのではないかと考えた。

茅狩りはスキ草原を鎌で刈って行き、それらを束ねて、ポッチをつくるというプロセスで行われる。当然だがこれら一連の作業は全て一人で行われる。自分の労働の結果が刈った跡地、ポッチとして形をとって表れる。これらをあれこれ考えながら試行錯誤をしてスキを刈っていく。翻って都会での工場などの作業や会社での業務はどうだろうか。自分の作業が全体においてどういう位置づけであるのかイマイチ判然としない。また、仕事の結果が給与という形でしか理解できない(もちろん、私は社会で仕事をした経験があるわけではなく、あくまでアルバイトなどの経験と想像を基に語っているのであるが)。しかし、茅狩りにおいてはそうではなく作るということにおいては自己完結している。自分で作り上げたポッチや刈り上げた跡地を知覚で認識することは労働の原初的な喜びであると思う。さらに、成果物を人に評価してもらい承認を得るとするのは、社会的承認の起源でもある。人間は自分のした行為に対して評価をして欲しいという欲求がある。このような達成感や被承認感覚を久々に取り戻すことができた。無論、茅狩りを仕事として継続的に一定の商業上の要請にしたがって行うとするとまた意識も変わってくと思われるが、それでもこのような感覚は普遍的なものであると思う。

これらの事から労働は単なる生活上の必要物を生産するだけの行為ではないという仮説をたてられる。もちろん、このようなことは直感的には誰でも感ずることである。しかし、現代社会の設計図はどちらかと言えば労働の合理的・経済的側面のみを強調しすぎている感がある。それは今でも安易な経営学的なマネジメント論やシステム論からも伺える(もちろん人間の感情的・情緒的側面に対して考慮した上でそのような事を説く良書もたくさんあるが)。そして、私もここ最近人をうまく機能させるためにはどのような仕組みが有効なのかという人間の実存という視点を欠いた浅はかな事を考えていたので、今回茅狩りに参加してそれをうまく是正することができた。



何だか偉そうなことを書いてしまいました。見返してみると張りぼてだらけの文章でとても恥ずかしいです。安易な社会批判も見苦しい限りです。本当に僕が伝えたいのはすごく楽しかったということだけです。水上の方々や青水のスタッフのみなさん本当にありがとうございました。皆さんみたいに社会に出てから仕事とは別に新しい試みをしている方々を見ると僕にとっても大変希望が持てます。決して学生だけがこういったボランティア的な社会貢献ができるわけではないのですね。水上の皆さんも突然やってきた若造に優しくしてくださったり、色々な事を教えてくださってとてもうれし

かったです。また学生のメンバーからも色々な刺激を受けました。すごく貴重な経験ができました。重ねて御礼申し上げます。ありがとうございました。



10周年記念フォーラムに思うー学生部のあり方を中心にー 石原光訓（学生部代表・早稲田大学政経学部4年）

10月23日、土曜日。朝から思うところあって池袋へ。なかなか思うようには行かないものだ。睡眠不足。丸の内線で東京駅へ。レンタカーのオフィスがわからず、苦戦。なんとか到着。予定より、30分程度の遅延。この遅れが、高速道路の渋滞ともあいまって2時間のフィールド到着の遅延を生んだ。土曜日の高速をなめてはいけなかった。

今回の目的は、3つあった。1、若手(学生)がみなかみ藤原集落及び茅刈りなどの作業に関心を持っていることを地元へアピールする、2、10周年を迎えた森林塾の次の10年を構想する、3、上流域の水調査を実施し、「飲水思源」という言葉の原点に立ち返る。

1は上々、2は充分、3は今後に期待。1は若干のドタキャンがあったものの、飲み会や茅刈りでは、その存在感を十分に発揮し、且つそれぞれに思うところや学びがあったようである。詳しくは、個人感想に譲りたい。2については、草原再生フォーラム直後の幹事会でも僭越且つ恐縮ながら指摘させていただいたが、森林塾青水は今後どのようなスタンスで地元藤原集落と関わっていくのかを再考する時期であると感じる。「地元をどうするのか」という一大事を森林塾任せ、森林塾ありきで考えられてしまう関係性は、少し疑問がある。地域活性の本旨はそこに住む人間の活力を取り戻すことであり、そこに住む人間がそこに住むことを楽しみ、誇りにしていることが前提となる。その楽しさや誇りをお裾分けするのが、本来の農村観光(よくエコツアー、グリーンツーリズムとか言われる)の目指すべき姿であると思う。その意味で、自分の足で歩き、自分の目で見て、自分の頭で考え、自分の手でつくること(参考:吉本哲郎著『地元学を始めよう』)が必要なのだ。地元の自発性をなくして、地元での活動は成立しないことを、忘れてはならない。今回の10周年記念フォーラムにおいても、目に見える形、目に見えない形での協力や賛同がたくさん存在したはずだ。目に見えないモノゴトを想像し、大切に作る姿勢を常に持ちたい。

3について、若干の報告をしたい。「水を飲めば、源を思え」という、飲水思源の考え方は、今後人口減少と共に

衰退が懸念される上流の活力を維持していくためにも、下流民が持続可能に水の供給を得るためにも、必要不可欠な発想であると感じている。その水について、私たち下流民は何を知っているのだろうか。上流でさえ、蛇口をひねれば水は出る。しかし、その構造は都市と同じなのか。どこから来た水が、どのように処理され、私たちの蛇口を満たしているのか。この原初的な疑問を大切に、学生部の新事業化も念頭に、調査を行った。今回は林親男さん、そして、奈良俣ダムを訪問し、インタビューを行った。簡単な調査報告は、以下に記載するが、まずは、今回の調査からわかったことと今後の展望を述べたい。最大の気付きは、「地元の当たり前な生活のためには様々な知恵や工夫、仕組みが存在している」ということだ。その都市との差異（地元民にとっては当たり前）に私たち都市民は、どう向き合うのか。その知恵や工夫、仕組みを賞賛するとともに、自らのライフスタイルを見つめなおし、当たり前なことが当たり前として存在し、持続していることに対して感謝することからはじめたい。そして、将来世代に至るまで持続可能な形でこの社会の「当たり前」を如何に構築していくのか、あごを引いて、足元から、考えたい。そのために必要な素材が都会から離れた場所にはいまだに存在している。森林塾青水学生部、しがらみや利益相反のない立場から、持続可能性を考える一役を担っていくべく、舵取りをはじめている。もっと深掘したホンネを引き出していけると、より楽しく、かつ有益かなと思うところである。



■「会員・会友」コーナー

◆学生部会員が 21 名に！

事務局

「10 周年記念フォーラム」参加を機に以下の皆さんが会員登録、11 月末現在の学生部会員数は 21 人になりました。次世代につなぐ期待と希望の星群です。」先輩諸兄の愛の鞭をよろしく願います。（'ー'）

◆志援(協賛)企業会員は 24 社・団体に

事務局

新たに、沼田地区のさくらドライ(根岸陸男社長)さまならびに大利根酒造(阿部倫典社長)さまにご賛同をいただき、11 月末現在の協賛会員ネットは 25 社・団体(うち、地方自治体 1、学校法人 1)となりました。ご紹介の労をお取りいただいた品田賢一さまに厚くお礼申し上げます。

◆古民家再生奮闘記 その④

北山郁人

雪に閉ざされた室内での作業が始まりました。床板の乾燥が進むまでは、室内の塗装をしました。まず新しい柱と古い柱などに色むらがあるため、柿渋を塗って統一。壁には漆喰。前の家でも何度も塗っていたので、夜中の作業もスムーズで、二人であっというまに塗ってしまいました。もうか所、後にやった作業ですが、土壁塗りもしました。トイレ側の壁が、薄いベニヤをはがすと土壁がむき出しで、崩れかけていました。でも、藁が顔を出しビビの入った土壁はとても趣があり、室内の壁を取り壊したときに出てきた土壁をもう一度練り直し、補修し塗りなおしました。



大量の廃材を薪ストーブで燃やしてもこの家かなり寒い！原因はとにかく壁がとても薄い！室内のベニヤを剥いてみると、その向こうは柱とトタンのみ！断熱材もなく、室内の水気のあるものが一晩で凍りつくほどでした。むしろ、家全体が土壁だった昔のほうが、暖かかったではと思いました。また寒さのもう一つの理由は、家の傾きのせいか窓が隙間だらけ！雪が吹き込む箇所もあったので、窓にビニールを張り、室内に TENT を張りその中に布団を引いて寝ることとなりました。家の中でキャンプだ！と長男は喜んでいましたが・・・。

滞在中の日課となったのが雪かき。スキーのインストラクターをしていた雪大好きな妻が楽しんで？やっていましたが、一晩で玄関前が埋まってしまうことは日常茶飯事。家が裏通り沿いにあるため、除雪車の進入が少し遅く、出かけたのに車が埋まっていた、あわてて雪掘りをした事もありました。またご近所の方が除雪機で雪かきをしてくれたこともありました。家の前はゆる～い坂道。これは遊ぶのに最高！ソリで坂を駆け下りたり、ママがスキーをはいて長男初のスキーレッスンをしたり！雪合戦にかまくら作り、雪ならではの遊びを満喫することができました。





時々通う冬の作業は寒さと、粉じんと戦いでもありました。最後まで残っていた囲炉裏の部屋も床をはぎ、囲炉裏を解体し台所に接する土壁を崩す。また土を掘って温水パイプを埋め込む作業。土埃に灰、そして床材の加工も家の中・・・ともなれば埃、埃！作業場と居住空間との壁も当然ビニール張りにし、埃が入らないようにしましたが、ビニールハウスの中で生活しているみたいでした。しかし、どんなところも子供たちにとっては遊び場です。家の中に突然あらわれた土の部屋(囲炉裏部屋の床下)はそのまま砂場に。乾燥途中の床材はシーソーになっていました。

室内が寒いのは目一杯着込んで寒さ対策。しかし・・・まさか車も凍るとは！愛車のサーフ君は廃油でも走るエコカー。天ぷら油を濾過して快適走行！ところがあまりの寒さに燃料が凍りつきエンジンがかからない、走り出しても登れない。寒冷地用軽油の存在理由を痛感しました。



乾燥が進んだ床材をいよいよ加工します。厚さ 30 ミリ、長さ 4mの地元産のスギ板。まず、床板を並べ替え、その上にブルーシートをひいて床材を固定するのは残った木材で作り工具を設置。表面を一気に削るには、一枚が長いのでその分作業が大変で、室内の壁ぎりぎりいっぱいまで使って作業しました。それぞれの床材を結合する為に、床材をまっすぐに立て溝切りカッターを使って、溝を彫ります。両側に彫り込み、細い板をそこにはめ込み結合する雇い実(やといざね)という方法をとりました。一本の木を全て使うことで安く床材を仕入れたため、床板の幅は 25～10cmとまちまち。それを室内の空間にぴたりと並べ、また玄関から見栄えの良い材料を手前にする・・・結構頭を悩ませました。といっても、まだあと一年は乾燥させるためとりあえず並べただけ。それでも厚みのある床板なので固定しなくても大丈夫でした。そして、なんとか床を仕上げる事ができたのは、引越し予定の前日となりました。(続く)

■ 第7回講座「コモンズ村・ふじわら」



上ノ原は人と生き物の入会地

第7回 カンジキで歩こう雪の上ノ原

森林塾青水では、ススキ草原(茅場)や古道(フットパス)、古民家、など地域の自然・文化資源の再生と活用に取り組んでいます。この講座は、その実践プログラムです。7年目の今年は。これまでの経験と成果をふまえ、草原の持続的な利用と管理ができるよう、より良い仕組みや方法を構築中です。今回は2010年度の最終回。和カンジキで上ノ原周辺を散策し、雪上の動物の足跡や糞など、生き物の痕跡調べを楽習します。毎年大好評の郷土料理「ぼた」もお楽しみいただきます。 **参加者を募集します。**

■日程：2月19日(土)～20日(日)

■集合：初日の10時20分、JR上毛高原駅改札口
〈上越新幹線〉東京 8:52—上野 8:58—大宮 9:18—高崎 9:52—上毛高原駅 10:14

■参加費：1万円(森林塾青水正会員は9,000円、学生会員は7,000円)

※宿泊費、食費(夕食・朝食・昼食)、保険代などを含みます。初日の昼食は各自持参して下さい。現地までの交通費は自己負担です

■宿泊： ロッジ「樹林」

群馬県みなかみ町藤原3628 (0278-75-2040)

■服装など： 防寒具、オーバーズボンなど、雪上を歩くのに適した服装で。カンジキやスノーシューをお持ちの方はご持参下さい。ない方は塾でも準備しておきます。お子様ずれの方は、ソリをご持参されると楽しさ倍増です！ その他、サングラス、水筒、カメラ

■申し込み・問い合わせ

森林塾青水事務局・コミュニティデザイン

東京都中央区湊1-2-3-301

【電話】03-6228-3503

【ファクス】03-6228-3504

【メール】info@commonf.net

■当日・緊急連絡先

清水携帯 (090-3575-2283)

参加申し込み 締切日2月4日

□ 編集後記 ～塾長のつぶやき～

○くチョッキリも地球の仲間秋暑し> 9月初旬、地元の林ふみ子さんから俳句入りのお便りをいただいた。チョッキリはウメやミズナラなどの葉に切れ目を入れて巻き、幼虫の餌にするオシブミ科の甲虫。今年の夏は、ミズナラの団栗が例年になく沢山落ちていたのに気がついたふみ子さん。ミズナラにとっては敵みtainな存在だけど、地球の仲間の一員でもあるとの句意。生物多様性の本質をついた名句！環境教育や俳句教室の教材にしては、と思うが如何。



○ヒトは善玉キーストーン種たり得るか 生物多様性～生態系を構成する仲間の多様なつながりの中で、要石の役割を果たしている種をキーストーン種というらしい。かつてヒトは、里山を適切に利用することにより豊かな生態系を保ってきた善玉キーストーン種だった。現代のヒトは、破壊的・侵略的な種としての汚名を冠されて久しい。里山の仲間たちにとって、その横暴ぶりはチョッキリの比ではあるまい。果たしてヒトは、生き物の世界で外来種同様の嫌われ者・悪玉になり下がったままで終わるのか、それとも善玉キーストーン種として尊敬される誇り高き存在たり得るのか。残された期間は10年。流域コモンズの構築を宣言した当塾。国や誰かのせいにしても仕方がない。我々一人ひとりの実践あるのみ。



○「私にはまだ茅語が分らなかった」 学生部会員の岩寄絵莉子さん。10月24日の茅刈り体験を通して3つの新しいことに気付かれた。「人間と自然を繋ぐ自然」というのがその内の一つ。(11頁参照)「自然と人間を結びつけるのは人間」と考えるのが普通だと思うが、彼女は「自然が人間と自然を繋ぐ」というのだ。鎌をふるって茅を刈っている時、「今日の調子はどう？」みたいな会話が展開されているように感じ、「まだ茅語は分らない

けど、茅を切るたびに自然と対話をしている」気分だったという。何と新鮮な感じ方ではないか。小生も茅語が喋れたら、さぞかし楽しさだろう。『今日は暑いね。でも、朝夕だいぶん涼しくなってきたね』なんて話しかけているうちに、『今日も来てくれたの。精が出るね』なんて話せるようになるかもしれない。

○のっぺらぼうの石塔と語らう 10月23日。10周年記念フオーラム初日のエクスカージョンで立錐型の石塔(下の写真)の即席除幕式をやった。ご覧のように何も刻字されていない、文字通りののっぺらぼうの石塊(仮称:のっぺら坊)。ただし、2万年ほど前に武尊山大噴火の折に吹き飛んできた時代物。そこからずっと、この上ノ原に鎮座して自然環境の変化を体験してきた先住民の長だ。



いぶかしげに石塔を覗きこむ皆さんに申上げた。「この石の前で、上ノ原という自然の中で感じたことを思い浮かべてみて下さい。そして、それを皆さんの言葉にして石面に記してみて下さい」。飲水思源、水恩碑、山川草木悉有仏性、万物有情、獣恩碑、ありがとう、……。何でもよい。草木や野鳥や昆虫たち、水、石、風や雲たちと対話したり心を通わせる機会を持ってほしい。自然と人間をつなぎ、仲間としての一体感を持たせてくれるような、そんな場所、さすが、ツール、仕掛けになってくれると嬉しい。因みに小生は「草木供養」と書いてみた。

○「学生部」諸兄の若い感性に期待 学生部の皆さんが寄せてくれた感想文。いずれも瑞々しい感性が横溢していた。それだけでなく、いっそもう彼らに任せの方がよいのではないかと、思わせるような頼もしささえ感じた。「ここにある日本の原風景は、地元民ではない私のような若者でも、守っていきたいと思える、それだけのインセンティブを与える。(中略)原風景から得られる考え方や発想がこれからの日本の大きな財産になるのではないか」(梅田華衣さん)。「みなかみでは自然から発せられる音や景色などを全て吸収しようと身体が開かれている感覚を味わうことができた。(中略)生物多様性はなぜ守るのか。小難しい説明ではなく、ここにある自然を守りたいと思う、そんな単純な、理屈を超えた理由が大事だと思う。それが人の心を動かし、人を動かす原動力になるのではないだろうか」(松井健太郎さん)。これ以上言うべき言葉を小生は持ち合わせていない。

語りあふロマンのかげら冬銀河

(青)